

カが訊いた。

「え、もうとつくに……。」

「散歩しなくつて？景色のいゝ所を御案内しますわー！」

「散歩しよう。お前も来たらどうだ。」と彼は妹に言った。

「いゝえ、わたしはマーガリタ・ロチオノウナさんや大佐と一緒にゐた方が嬉しいの。」

「ホツ、ホツ、ホツ。わしの半分死んだ身體が轉げ込まうとしてゐる墓場の縁に立つてゐるのが嬉しいぢやと？」と大佐は高い笑ひ聲を出して、「どうしてそんなことをお言ひなんぢやな？」と訊いた。

「この次ぎは、ワアーレンカは俺にかう訊くに違ひない。わたし達の家にゐるのは退屈でせう？」

と「アーレンカと一緒に家から庭へ出た時にイポリット・セルゲーエヴィチはさう思つた。けれど彼女は彼にかう訊いた。

「あなた、わたしのお父さんをどう思つて？」

「さう！」とイポリット・セルゲーエヴィチはやさしく言つた。「尊敬すべき人です！」

「まあさう！」とワアーレンカは満足氣に答へた。「どなたもさう言つて下さるのよ。お父さんは驚くべき勇敢な人ですの。お父さんは御自分のことはお話しなさいませんが、小母のラツチエツキーがお父さんと同じ聯隊にゐたもんですから、ゴールネー・ダブンヤークの戦争でお父さんの乗つた馬の鼻の穴が鐵砲玉に貫かれた話をよくしますわ。その馬はお父さんに乗せたまゝ眞直ぐにトルコ兵の間へ進んで行つたんですつて。するとトルコ兵が後から追つて來たんですつて。そこでお父さんは向きを代へてトルコ兵から逃げ出さうとしたんださうですの。けれど勿論馬は殺されてしまつてお父さんは倒れてしまつたんですつて。すると後から四人の敵兵が追つ掛け來るのですつて……やがて一人が近づいて來て、銃を逆さに持つてお父さんの頭の上に振り擧げたのですつて。お父さんはひらりと飛んで——ポカンと相手を殴り飛ばしたんですね。するとその相手は倒れてしまつたのですつて。そこでお父さんは連發銃を敵の顔に差し向けて——ドンと一發！それからお父さんは死んだ馬の下から自分の片足を引き出したのですつて。そこへ外の三人が突進して來る、つゞいて多くの敵がやつて來る、する所へ味方の兵が突撃して來たんですつて、ヤーコウレフも一緒に——ヤーコウレフつて御存じでせう？そこでお父さんも死んだ兵卒の銃をひつたくつて立ち上り——

そして前進したんですつて！お父さんはそんなに強かつたけれども、危険が迫つて来たんですつて。お父さんは頭の上から一人のトルコ兵を射つたんださうです。とその銃が壊れてしまつたのですつて。そして手には劍一本しか残つてゐない、その劍も悪い切れない奴なのですつて。するとそのトルコ兵は銃槍でお父さんの胸を突き殺さうとするのですつて。そこでお父さんは手にある銃の負ひ革を握つたまゝ、そのトルコ兵を後に引きずりながら味方の方へ走つて行つたのださうです。するとお父さんは味方にはぐれてしまつたことが解つたのですつて。そこで敵の方へ向きかへつて、そのトルコ兵から鐵砲をねちり取り、敵の方へ投げつけたのださうです——萬歳！そこへヤコウレフが兵卒を引き連れてやつて来て、實に熱心に戦ひ、たうとうトルコ兵を退却させちまつたんですつて。その功績でお父さんはチヨーチの勳章（セントチヨーチの勳章といつてロシアの勳章の中で最も名譽あるもの一譯者）が授かつたのよ。でもお父さんは怒つてしまつたの、といふのはその戦争でヤコウレフを二度、お父さんを一度助けた同じ聯隊内の一人の下士にチヨーチ章を授けなかつたからです、それでお父さんはその勳章を斷つてしまつたのよ。けれどその下士がチヨーチ章を貰つた時、お父さんもその勳章を受けましたの。」

「あなたのお話は、あなたがまるでその戦争に参加したもののやうに詳しいですね。」とイポリット・セルゲーエヴィチは彼女の話の間に口を挟んだ。

「え、え……。」と彼女は靜かに言つて、溜息をしながら兩眼をしかめた。「わたしは戦争が好きなの、……だから若し戦争が始まつたら、慈悲の神の姉妹（赤十字軍のこと）なつて出征しようと思つてますの……。」

「そしたら僕は軍人となつて出征しようかな……。」

「あなたが？」と彼女は彼の身體をまぢまぢ見ながら訊いた。「まア、お冗談でせう、あんまり貧弱な軍人さんぢやありませんか……弱くつて、瘦せつぽの。」

この言葉は彼の心を打つた。

「僕は非常に丈夫ですよ、保證して見せませう。」と彼は彼女を脅かすやうに言つた。

「まア、さうはおつしやれないでせう！」とワアーレンカは彼の言ふことを信じようともせず、落ちつき拂つてさう言つた。

彼女を腕に抱いて力一ばい——彼女の兩眼から涙が迸り出るほど力一ばい自分の胸に抱ぎしめた

い慾望がならむらと燃え上つた。彼は素早く周囲を見廻して肩を顫はした。そして直ぐと自分の衝動を恥かしく思つた。

二人は林檎の木が行儀よく並んでゐる道に添つて庭の中を歩いて行つた。その林檎の並木の後の道の端れには家の窓がこつちを見詰めてゐた。林檎が、木から落ちては地面を鈍く打つた。その音が四邊にひびいた。と彼が訊いた。

「今話した下士もあなたに結婚を申し込んで来るでせうね？」

すると彼女は荒々しく力を込めた聲で、

「お待ちなさい……」とワアーレンカは彼の袖を握つて足を停めさせ、「みんなはわたし達のことを何といふでせうね……。」

彼は鋭い視線を彼の方に投げてかう言つた。

「僕は下女達の噂話を立ち聞きなんぞするのは嫌ひですよ……。」

「でもわたしは好きなの……。」とワアーレンカは言つた。「自分だちばかりである時は、下女達はわたし達——つまり自分達の主人達のことをいつも非常に面白さうに話してますわ……。」

「そりや面白いことかも知れない、だが気持ちのいふことぢやないからね……。」とイポリット・セルゲーエヴィチは笑つた。

「まアどうして？みんなはいつもわたしのことをよく言つてますわ。」

「そりや結構なことだね……。」

彼はそこで烈しく、彼女の心を傷つける程に鋭く言つてやりたい強い衝動に驅られた。今日の彼女の凡ての行爲は彼を苛立たせた——先刻、家の中にある時は、彼女は長い間彼の方に何の注意も拂はなかつた。それは、彼が彼女の招ぎに應じて來たので、また彼女に逢ひに來たのだといふことをまるで知らないかのやうであつた。そして中風の父や乾き切つた小母に逢ひに來たのではないといふことをまるで知らないかのやうであつた。それから彼女が彼を虚弱者だと言つた時は、彼女は彼を見るに一種の輕蔑を以てした。

「こうした事は凡てどうしたといふんだらう？」と彼は自分に言つた。

「もし俺の外貌が彼女の氣に入らないならば、また俺を内面的に見ても興味がないならば、彼女は俺に對して何を感じてゐるのだらうか？たゞ新らしい顔——そしてそれ以上何物でもなかつた

のか？」

彼は、彼女が自分に心を惹かれてゐると信じてゐた。そして彼女は、率直と無技巧の技巧とを以て愛嬌を呈してゐたと思つてゐたのに。

「恐らくこの女は俺を馬鹿者だと思つてゐるのだらう……そして俺が伶俐者になることを望んでゐるのだらう……。」

「小母さんの言つたことが當りましたわ……雨が降りさうですよ！」とワアーレンカは遠くの方を見ながら言つた。「ね、そら、あんな真黒い雲……そして蒸し暑くなつて來たでせう、雷雨の前はいつもかうですわ……。」

「そりや困つたね……。」とイポリット・セルゲーエヴィチは言つた。

「すぐ引き返して、妹にさう言つてやらねばならん……。」

「どうして？」

「雨が降り出さないうちに家へ歸る方がいゝから……。」

「だれがあなたを歸さうとするの？それに雷雨が來ないうちに家へ歸ることなんぞ出來やしません

わ……わたしの家に待つてゐた方がいゝんですわ。」

「それで、もし雨が晩までに歇まなかつたらどうします？」

「そしたらわたし達の所へお泊りになればいゝのですわ。」とワアーレンカは何でもなく言つた。

「いゝや、そりや不便ですよ……。」とイポリット・セルゲーエヴィチは反對した。

「まア、まア！たつた一晚位不便を忍ぶことがそんなに大へんでせうか？」

「僕は自分の氣持ちなんぞは構はないんですが……。」

「そんなら他の人達のことなぞ御心配下さるな——みんなはてんでに自分のことはしますから。」

二人は言ひ争ひながら歩いて行つた。そのうちに真黒な雲は見る見る大空一ぱいに擴かつて來た。そして最早雷鳴が何處か遠い所でし出した。壓へつけるやうな蒸し暑さが空中に充ちた。それは恰度だんだんと近づきつゝある雷雲が、日中の焼けるやうな炎熱を一所に集めながら、それを前に押しやつて來るやうな風であつた。木々の葉は、氣持ちのいゝ濕りを待ち望んでゐるかのやうに身動きもしない。

「引き返させうか？」とイポリット・セルゲーエヴィチは言つた。

「え、息苦しいからね……わたしは何か起る前がほんとうに嫌ひなの……雷雨の前でも、お休みの前でも。雷雨でもお休みでも、そのものは非常にいゝんですけれど、それを待つてゐる前がちれつたくて堪らないの。どんな事でも今直ぐすることが出来たらいいわね……横になると直ぐ眠ることが出来るの——それは多で寒いので、それから眼を覺すと——それはもう春で、花が咲いて……太陽が輝いてゐて、それから直ぐと眞暗くなつて、雷が鳴り、土砂降りがある。」

「他分あなたには、男もそのやうに突然に思ひ掛けなく變化したらいいんでせうね？」とイポリツト・セリゲーエヴィチは訊いた。

「男はいつも面白くなくてはいけません……。」と彼女は金言めいたことを言つた。

「だがその面白くしてゐるといふことはどういふことですか？」とイポリツト・セルゲーエヴィチは苦々しく言つた。

「どういふことですか？ まア……それをいふのは六ヶ敷しいわ……もしみんながもつと……活々と……さうです……もつと活々としてゐることが出来るなら、いつも面白くしてゐることが出来る」とわたし思ひますわ。もつとよく笑つて、歌つて、遊んだなら……そして、もつと大膽で、張くて

もつと圖々しくさへなつて……そしてもつと下品でさへあつたならば……。」

彼は彼女のいふことを注意して聴いた。そしてから自分自身に言つた。

「この女はこんな事を言つて、自分が望んでゐる通との俺りの關係の内容をほのめかしてゐるのか知ら……。」

「みんなには素速さがありませんわ……人生を面白くする爲めには、何事でも素速くしなければ駄目です……。」と彼女は眞面目な顔をして叫んだ。

「さうでせうかね？ 他分あなたのいふことは正しいでせう……。」とイポリツト・セルゲーエヴィチは柔かに言つた。「だが、言ひ換へれば全然正しくはありません……。」

「言ひ譯してはいけませんわ！」と彼女は言つて、「どうして全然ぢやないのです。全然正しいか、でなければ全然正しくないかどちらかです……善でなければ悪……美でなければ醜……議論するのは凡てかういふ風にするものですわ。それなのに人はかう言ひます、『彼の女は全く美しい、全く綺麗だ……』と。そんな風に言ふのも單に臆病から來てゐるのですわ……何かの譯で眞實のことをいふのが恐いのです……。」

「さう、だが、あなたは凡てを二つに分類するといふことで、余り無茶を言ひすぎますよ！」

「何故でせう？」

「眞實でないからです……。」

「男といふものはいつも或る同じ眞實にこびりついてゐるのですね！恰かも人生の凡てはその眞實の中に含まれてゐるかのやうに、そして人はその眞實なしには生きてゐられないかのやうにね。でもさうした眞實を求めるものがありませうか？」

彼女はぶりぶりして我むしやらにさう叫び出した。その眼を擧めそして妙に輝かしながら。

「あらゆる人が求めます、ワアルワアラ・ワシーリエウナさん。あらゆる人が、百姓始め……あなた迄も」とイポリット・セルゲーエヴィチは彼女が苛々し出したのを見たので、その苛々する譯を知らうとしてさう言つた。

「わたしは眞實なんぞ少しも求めませんわ？」と彼女はきつぱりと否定した。そして何物かを押し除けるかのやうに、手を身振りさへしがら、「もしわたしがそれが必要ならば、それは自分の爲めに求めますわ……あなたはどうして何時までも他人のことばかり心配していらつしやるのです？えゝ

？きつとあなたは、わたしを怒らせたばかりにそんなことをおつしやるのですわ……今日のあなたは厭に勿體ぶつて、意張つてばかりゐるのですもの……。」

「僕が？あなたを怒らせてゐるつて？如何して？」とイポリット・セルゲーエヴィチは狼狽して問ひかけた。

「如何してだかわたしには解りませんわ。あなたは退屈していらつしやるのでせう、他分……けれども……退屈なさらないがいゝわ。どうせわたしは口輪をはめられてゐるのですもの……たとへあなたに反對されなくつたつて、わたしは毎日毎日うんざりするほど家の人だちに口説かれてゐるよ。それもみんな結婚申込者のお蔭ですわ……あらゆる毒舌、下らない疑惑を浴せかけられてゐるのですわ……詰らないことを言つて御免ね。」

彼女の眼は燐光のやうに輝いた。その鼻腔は顫へた。そしてふいに起る昂奮でしよつちう戦慄してゐた。イポリット・セルゲーエヴィチは眼が霞んで來、心臓の鼓動が速くなつて來た。で來彼は夢中でその昂奮を鎮めようとした。

「僕は決してあなたを怒らせようとはしませんよ……。」

その瞬間、雷鳴が二人の頭上に轟き渡つた——それは恰かも、何か怪物のやうに大きく、そして臆病なほどに好人物な人間が大きな聲で哄笑したかのやうであつた。その恐ろしいひびきに吃驚した二人は顔へ上つて速座に足を停めた。が直ぐと急ぎ足に家の方へ歩き出した。木の葉は梢の上に顔へそして天鷲絨のやうに空一面に柔かく展がつた黒雲からは、その雲影が地上に投げられた。「でも二人はよくもこんなに議論しましたわね！」とワアーレンカは歩きながら言つた。「わたし、雲が近づいて来たことも気づかなかつ程ですもの。」

家の玄関の所には、まるで向日葵のやうに見える大きな麥藁帽子をかぶつたエリザウエータ・セルゲーエウナと小母のシツチエツキーとが立つてゐた。

「まあひどい雷ですわね。(とラツチエツキーは、イボリツト・セルゲーエウイチの方を眞直ぐに見ながら、きつぱりした太い聲で言つた。それは、暴風雨がやつて来たことを彼に言ふことが、自分の重大な義務と考へてゝもゐたかのやうであつた。それからままかう言つた。

「大佐はいまおやすみです。」そして行つてしまつた。

「このあらしはどうです！」とエリザウエータ・セルゲーエウナは顎で空を指して、「今夜はこゝへ泊

めていたよかねばならないでせうと思ひますの。」

「皆さんの御迷惑にさへならなければ……。」

「まるで世間の人見たいね！」とワアーレンカは昂奮して彼の方を見ながら言つた、それからまるで憐れむやうに「あなたはいつも、悪い、不自由な人々のことばかりを氣にかけてゐらつしやるのね……あゝ、神様！、あなたは、いつもピンと針ばかりで生きてゐることは、どんなに退屈だかといふことを知つて下さらなければいけませんわ！わたしのいつも考へてゐることは——不自由な人になりたければ勝手になるがいゝし、悪い人になりたければ、それは勝手に悪くなればいゝ、とかうですわ！」

「でも、神様御自身では正しい者は正しいとお言ひなさるでせう。」とエリザウエータ・セルゲーエウナは自身の優越権を感じながら、にこにこしてさう口を挟んだ。「家の中へ逃げ込まねばなりませんね……ねあなた達はどうかさいいますか？」

「わたし達はこゝで雷雨を見てゐませう。」とワアーレンカはイボリツト・セルゲーエウイチの方を見ながら言いた。

彼は頭を下げて同意した意味を現はした。

「もし自然の壮大な現象を見て、頭の中が空になつたり冷たくなつたりするやうだつたら、そりや詰りませんわ……それに、窓硝子の中からだつて雷雨を見ることも出来ませぬもの、ねえ！」

電光が閃めいた。と闇は電光に裂かれて、一瞬の間、今まで包んでゐたものを現はしながら顛へた、とまた閃めいた。二三秒間、水を打つたやうな静けさがつゞく、とまた雷鳴がひびき渡る。それは戦争の大砲の亂射のやうに、屋根の上をどろどろと轟き渡つた。風がどつと吹き起ると、地面の塵や芥を引き浚つて、一所に集めながらくると廻り、圓柱となつて空へ舞ひ昇つて行く。藁屑や紙片や木の葉が飛び廻る。燕共が驚き鳴きながら空の中を潜り飛ぶ。木の葉は梢の上に苦しうに鳴り、家の鐵屋根の上の砂塵が八釜しい音を立てながらがらがら鳴る。

ワアーレンカは戸の後に立つて暴風の戯れを見てゐた。イポリット・セルゲーエヴィチは吹き寄せる砂塵に眼を細めながら、彼女の背後に立つてゐた。玄關の暗い内側は箱のやうになつてゐたが、電光が閃めく度に、娘の美しい姿が放電の青い光で照らし出された。

「御覽なさい……御らんなさい！」とワアーレンカは、電光が雷雲を引き裂いたのを見てさう叫んだ。

「見たでせう？ 雷の雲が笑つてゐるやうでせう——さう見えなくつて？ たしかに笑つてゐますわ……きつとあそこには強い無口な人達が住んでゐるのですよ——黙つて、いつまでも沈黙をつゞけてゐるやうな人間がゐるのですわ。それがだしぬけに笑ふのですわ——その眼を光らし、その齒をむき出すと……さうすると雨が降り出すのですわ！」

屋根の上に、大きな重い雨粒が落ち始めた。始めは間遠に、やがてだんだんと間近になつて、つひには物を轉がすやうな音を立て出した。

「入りませう……。」とイポリット・セルゲーエヴィチは言つた「濡れますよ。」

彼は眞暗な中で、彼女と喰つついて立つてゐるのが恐ろしくなつて来た——恐ろしくもあり氣味悪くもあつた。と彼は、彼女のうなじを見てかう思つた。

「このうなじに接吻してやつたらどうだらう！」と。

ぴかりと光ると、大空の半分が明るくなつた。その光りでイポリット・セルゲーエヴィチは、ワアーレンカが立つたまゝ後に凭りかゝり、胸を光の方へ押し出すかのやうにして、兩腕を打ち振りながら何か速口で叫んでゐるのを見た。と彼は、彼女の背後からその外套につかまつて、殆んど彼女



の肩に凭りかゝるやうにし、喘きながらかう訊いた。

「どう……どう……どうかしましたか？」

「いゝえ、何んにも」と彼女は煩ささうに叫んで、身體をぐつと動かし、ぎつと壓しつけてゐる彼の手からすり抜けた。「まア、あなたは恐いんですか……男のくせに！」

「僕はあなたに驚いたんですよ。」と彼は小聲で言つて隅の方へ引つ込んだ。

彼女の身體に觸れた爲めに、彼の手は燃えるやうになつた、そして彼の胸には、彼女を抱擁した熱情が、しつかりと苦しいまでに抱擁したい熱情が、消すことも出来ないほど燃え上つた。彼はもう殆んど自制力を失つた、で玄關から去らうとして、雨の中に立つた、その大きな雨粒はまるで靉のやうに樹木を打つてゐる。

「僕は家の中へ入りますよ。」と彼は言つた。

「入りませうね。」とワアレンカも詰らなささうに同意して、音もなく彼の傍を通り抜けて戸の中へ入つて行つた。

「ホツ、ホツ、ホツ！」と大佐は笑つて、「どうしたんぢや！天の神の法則に依つて、すつかり取り

制へられたといふ譯かな！ホツ、ホツ、ホツ！」

「ひどいあらしですわね。」とラツチエツキーは大眞面目で、客の蒼ざめた顔をぢつと見守つた。

「わたしはかうした自然の狂亂は大嫌ひですわ。」とエリザヴェータ・セルゲーエウナはその冷たい顔をさも厭さうにしかめて言つた。「雷雨とか、吹雪とか——さうしたものは自然の浪費ぢやありませんか！」

情熱に壓倒されてゐるイポリツト・セルゲーエヴィチは、辛うじて踏みこたへて、妹に靜かに言つた。

「直ぐは止まないだらうか、どうだらう？」

「一晩中ですよ。」とマーガリタ・ロチオノウナが答へた。

「わたしもさう思ひますわ。」と妹もそれに和した。

「あなたはこの家から出ることは出来ませんよ。」とワアレンカは笑ひながら言つた。ボルカノフは、彼女のさうした笑ひの中に、何か致命的なものがあるやうな氣がして思はず頭へた。

「え、今晚はこゝへ泊めていたよかねばならぬでせう。」とエリザウェータ・セルゲーエウナは言つた。「カルモノの若木の藪の中をこの夜中に歩いて行かうものなら、着物が代なしになつてしまふでせう……」

「この家には部屋が幾つもありますわ。」と小母のラツチエツキーが言つた。

「それならば……と、ちよつと失禮して、雷にすつかり驚かされちまつたんで、……それでと、拜借するお部屋をちよつと見たいと思ひますが……ほんの二三分間、その部屋へ行つてゐたいですわ。」

イポリツトのこの低い切れ切れの聲は皆を驚かした。

「鹽化アンモニアがいゝわ。」とマーガリタ・ロヂオノウナは太い聲でつぶやいて、椅子から飛び上るとそこを去つて行つた。

ワアーレンカは顔に驚きを現はして部屋の中をそわそわと歩き廻りながら彼に言つた。

「直ぐ御案内しますよ……お部屋へお連れしますよ……静かなお部屋へ……」

エリザウェータ・セルゲーエウナは誰よりもすつと落ちつき拂つて、微笑しながら彼に訊いた。

「めまひがするのですか？」

と大佐がしやがれ聲で言つた。

「何でもないことぢや、直ぐ癒るわい。わしの同僚にマチヨル・コータロフといふ男があつた。その男は突撃最中にトルコ兵に殺されてしまつたつげが、そいつア大膽な奴ぢやつた。む、全く珍らしい奴ぢやつた。實に勇敢な青年ぢやつた。シストフの戦争で、その男は銃剣を持つて兵卒の眞先に立つて突進したが、その様子がまるでダンスの指揮でもしてゐるやうに落ちついたもんぢやつた——斬りまくり、なぎ倒し、大聲で叫び、持つた劍が折れると、棒をひつつかんでそれでトルコ兵を殴り殺したもんぢや。恐ろしく勇敢な奴ぢやつたよ。あんな男はたんとはあるもんぢやない。所がそいつが、雷と來たら意氣地がなくなつて、まるで女さ……おかしな話さ。恰度君のやうに眞蒼になつて、めまひし出して、そして「あ、あ」と叫びつゞけぢやつた。大酒飲みで犬のやうにはしやいで、丈は十二ヴァーシヨクばかりしかなかつたぢや……その男も今はもうゐないんぢや。」

イポリツト・セルゲーエウイチはちつと見ながらそれを聞いてゐた。それから詫びを言つて皆を落

ちつかせた。そして彼は自分を呪つた。頭がほんとうに眩暈してゐるのである。マーガリタ・ロチオノ  
ウナが彼の鼻の下へ嗅ぎ壺を持つて来て「これをお嗅ぎなさい」と言ふと……彼はその鹽化アムモ  
ニアを取つて、その刺すやうな臭いを鼻腔深く吸つた。さうしながら彼は凡ての光景が滑稽で仕方  
がなかつた。そしてワアーレンカに對して自分自からを卑下してゐるのを感じた。

雨は怒り狂つて窓に打ち當り、電光はきらきらと閃めき、雷のとどろきは驚いたやうに窓硝子を  
鳴らした。さうして凡てかうした事は大佐には戦争の喧囂を思ひ起させた。

「最後のトルコ戦争が……それは何處だつたが忘れたが……恰度こんなやうな動亂ぢやつたわい……  
雷が鳴る、雨が瀧と降る、電光がひらめく、大砲の一斉射撃、歩兵の亂射……そこでヤークエルフ  
中佐はブランデーの罎を取り出して、その口を唇に當て、ぐいぐいとやつつけたぢや。ところが彈  
丸が飛んで来てその罎を粉々にしてしまつた。中佐は手に残つた罎の首を見てかう言ふんぢや、「畜  
生、酒罎と戦争してやがる、」ホツ、ホツ、ホツ。ところでわしはかう言つてやつたぢや、「そりや  
迷ふよ中佐、トルコ兵は戦争で發砲してゐるんぢや、酒罎で戦争してゐるのは君ぢや。」とな、ホツ  
ホツ、ホツ。うまく言つたらう、どうぢや！」

「氣分が少しはよくなつて？」と小母のラツチエツキーがイポリット・セルゲーエヴィチに訊  
いた。

彼は悲しさを怒つたやうな眼でみんなを見ながら齒を喰ひしばつたまゝ、彼女に禮を言つた。  
と、彼の妹がワアーレンカに何か囁いてゐる。ワアーレンカは身體を曲げて耳を近づけて聞いてゐた  
が、何か疑はしさうにして驚いたやうに笑つてゐた。たうとう彼は皆んなから離れることが出来  
た。そして自分のに極められた小さな部屋の寢臺の上に身體を投げると、彼は自分の情熱を、戸外  
の雨の調子いゝ音に任せようとし始めた。

けれど自分に對する制御し難い憤怒と、どうしてこの憤怒が起つたのだらうとそれを知らうとす  
る欲求とが自分の裡に闘つた。殆んど自制力を失ふ程に闘つた——あの若い女に對する感銘がそん  
なに深く彼の心の中に喰ひ入つたのだらうか？しかし彼は、何か一つの事、その最後まで考へよう  
とする何かの目標に心を落ちつけることも出来なかつた。さうして、昂奮した情熱の恐ろしい暴風  
が彼の心中に荒れ廻るのである。最初彼は、その日の彼女との關係に何等かの解決をつけようと決心  
して見た。けれどその解決の後には彼が果すことを好まない所の或る義務、即ちワアーレンカと決

定した關係に入るといふ義務のあることを思ひ出して、その決心を棄て、しまった。といふのは、曾ふ迄もなく彼は彼の美しい女性と結婚することは出来なかつたからであつた。彼は彼女に對してそれ程深く夢中になつた自分を責めた。それから彼女に對する自分の行爲に大膽さの無いことを責めた。彼には、彼女がその身を全然彼に任せようとしてゐたやうに思はれた。また彼女は媚びに似たものを呈しながらも、彼に對して冷たくふるまつてゐたやうにも見えた。彼は彼女を、愚か者、一動物、情知らずと呼んでは、それをまた吾れと心に否定した。雨は脅かすやうに窓に打ち當り、雷鳴は家全體を揺がした。

しかし如何なる火でも消えない火はないものである。長い苦しい争闘の後、イポリット・セルゲイ・エヴィチは自分自身を理性の拘束に押し込めることが出来た。そして凡ての昂奮した情熱を心の底の深い所へ退去せしめ、自分に對する混亂と憤怒とを取り去ることが出来た。

若い娘といふものは、その野蠻な周囲の爲めに救ふべからざる程に汚されるものである。そして健全な思想の忠告は受け容れないで、自分の誤謬に對しては恐ろしく頑固なものである——彼の不思議な若い女は、この三ヶ月の間に彼を殆んど一個の動物としてしまった。そして彼はその不愉快さ

の爲めにすつかり破壊されてしまつたやうな氣がした。彼は彼女を人間にする爲めには出来るだけのことをした。で、もし何故もつとすることが出来なかつたといふならば、それは彼の落ち度ではなかつた。しかし彼は、自分の出来るだけの事をした後で、彼女から離るべきであつたのだ。それなのに彼は、適當な時に彼女から離れなかつたといふことは實に恥かしいことである。その上に彼女に對して恥かしくも肉慾の昂奮を起したといふことは自から責むべきことである。

「同じ状態に置かれた俺よりも下等な人間でも、俺よりはもつと惻巧だつたかも知れぬ。」  
といふ思ひ掛けない考へが苦しくも彼の心を打つた。

「名譽が俺を制御するのだらうか？それとも或ひは單に俺の弱い感情がさうするのだらうか？もしそれが感情でないならば、かくの如く俺を昂奮させる所の肉慾は一體何だらう？要するに、俺には戀が出来るだらうか……俺は人の夫となり父となる事が出来るだらうか？俺はさうした義務を果せるだけのものを持つてゐるだらうか？一體俺は生きてゐるのか？」彼はかうして自分を詰問してゐるうちに心の中が冷たくなつて来るのを感じた、そして自分を屈伏させる程の臆病心が湧き起るのを感じた。

間もなく彼は夕飯に呼ばれた。

ワアーレンカは見探るやうな流し目をして彼に挨拶をした。そして愛相よく言った。

「頭痛が直つて？」

「え、有りがとう……。」と彼はそつけなく答へて、彼女から遠く離れて腰を下し、そして自分にかう言った。

「この女は俺にどう言つていゝかも知らないのだ、『頭痛が直つて？』とは何だ！」

大佐はこくりこくりとやりながらまどろみ始めた。そして時々鼻をかいた。三人の女は長椅子の上に並んで坐つて何か話らないことを饒舌り合つてゐた。窓を打つ雨の音はだんだんと静まつて來たがその微かながらも絶え間ない音は、これから限りなく長い間地面を濕さうとする根強い雨の降り方をはつきりと證據立てゝゐた。

間は窓近く迫つてゐた。部屋の内は狭苦しく、その上に三つのランプから發する石油の臭氣が充ちてゐた。その臭氣には大佐から發する臭氣も混つて、部屋の空氣を一層息苦しくし、そしてイポリット・セルゲーエヴィチを一層苛々させた。

彼はワアーレンカの方を見てかう考へた。

「あの女は俺の傍へ來ようとしな……何故だらう？ エリザウェータの奴め……何か下らぬことを言つたのぢやないか……俺に對するワアーレンカの様子を感じたのぢやないか？」

食堂では、肥つたテクラが急しく働いてゐた。彼女はその大きな眼で客間の方を覗き見しては、黙りこくつて煙草をふかしてゐるイポリット・セルゲーエヴィチの様子を伺つた。

「お嬢さま、夕飯が出來ました……」とテクラは、客間の戸口にそつと姿を現はし、溜息をしながらさう言つた。

「さア皆さんどうぞ……イポリット・セルゲーエヴィチさん、どうぞ。小母さん、お父さんは起す必要はありませんわ、このまゝ眠らして置ませうよ……食堂へ連れて行くとまたお酒を飲みたがりますからね。」

「それがいゝわね……。」とエリザウェータ・セルゲーエウナが言つた。

しかし小母のラツチエツキーは肩を揺りながら小聲で言つた。

「今になつてそれを考へるのは遅いですよ……お父さんはお酒を飲めば直ぐ死んでしまふでせう。」

でもその代り喜ぶでせう。もしお酒を飲まなかつたなら、あと一年は生きますわ。でもそれは喜ばないでせうよ。」

「それもさうですわね……。」とエリザヴェータ・セルゲーエウナがまた言った。

食卓ではイポリット・セルゲーエウイチはワアーレンカの傍に坐つた。そして彼は彼女と接した爲めにまた或る昂奮が起つたことに氣づいた。彼は彼女のガウンに觸るほど近く彼女に接近したくて困つた。彼は自分のさうした心の欲求に驅られながら自分自身にかう言つた。「一體彼女に對する俺の有頂點の中には、精神的の力以外の肉慾の執拗さが非常に在る」と。

「憐れなる心よ！」と彼は痛ましさうに自分に言つた。それから彼は、自分のことに就て眞實のことを言ふことを怖れなかつたといふこと、自分の「自我」のあらゆる變化を如何に理解すべきかを知つたといふことを、殆んど誇りを以て考へて見た。

彼は自分のことに没頭していつまでも黙つてゐた。

始めの間はワアーレンカは時々彼に話しかけた。それも簡単に一言位で應答してゐたが、たうとう彼と話すのがすつかり厭になつたらしかつた。たゞ夕飯の済んだ後に彼女と彼とだけが残された

時、彼女は單純にかう言つた。

「どうしてそんなにふさいでゐらつしやるの？ 退屈なの、それともわたしが厭なの？」

そこで彼は、ふさいでもゐないけれど、彼女を厭がつてなんぞ勿論ゐないといふことを答へた。

「それならどうなさつたんですの？」と彼女は問ひつゝけた。

「別にどうもしやしません、ほんとうに……たゞ……時々……餘り氣をつかひ過ぎたもんで疲れたんです。」

「氣をつかひすぎましたつて？」とワアーレンは心配さうに反問した。「だれに？ お父さんに？ 小母さんがあなたとちつともお話しなかつたからですわね。」

彼は自分のかうしたあけすけなことや途方もない愚かさに思はず赤面した。しかし彼女は彼の答へも待たずに、微笑しながら言つた。

「そんなぢやいけませんわ、さうでせう？ ねえ？ わたし、陰氣な人が大嫌ひなの……さア、カルタをしませうよ、いゝでせう、……やり方を御存じでせう？」

「僕は下手ですよ……それに正直を言ふと、僕はそんなことをして無駄な時間をつぶすのが嫌ひな

んです。」とイポリット・セルゲーエヴィチは言つて、もう彼女と仲直りが出来たと思つた。

「わたしもさうなの……では何をしませうね？ ほんとうにこの家は退屈ですわね？」と彼女は悲しそうに言つた。「あんまり退屈だからあなたがさうなつたのでせう。よく解りますわ。」

彼は彼女の言ふことに反対した。そしてだんだんと話して行くうちに、彼の言葉はますます熱烈になつた。つひに彼は、自分がいかに戀に苦しんでゐるかを自分ではつきりと知つた。

「あなたさへ厭でなかつたら、僕はあなたと砂漠の中にも退屈はしません。」

「まアわたしどうしませう！」と彼女は彼につかまつた。その、彼を喜ばさうとする彼女の心が飽くまでも眞剣だといふことが彼にも解つた。

「あなたはどうもする必要はありませんよ。」と彼は、外に言ひたい言葉を胸深く隠しながらさう答へた。

「いゝえ、ほんとうにあなたは、この田舎へ休みにいらしたのです。澤山澤山勉強していらしたんです。丈夫にならうとしていらしたんです。だからあなたがいらつしやらない前に、あなたの妹さんはわたしにかう言ひましたわ「あなたと二人で、今度来る學者をよく休ませ、よく慰め

て上げませうね」つて……けれどわたし……何をしたんでせう？ ほんとうに……わたしは……もしわたしがあなたのその退屈なお心を取り去ることが出来るならば……心からキツスでもして上げますわ！」

眼の前が眞暗になつた。そして身體中の血が、あらしのやうに心臓に流れ込んで、彼はすつかり夢中になつてしまつた。

「して……キツスして……キツスして……。」と彼は彼女の方を見もしないで彼女の前に立ち上りながら、小聲でさう言つた。

「おゝ！あなたはそれが欲しかつたのね！」とワアーレンカは笑つて、その場を去つてしまつた。

彼は彼女の後を追つた。そして戸の引手を握りながらちよつとの間立ち止つた。彼の全身が彼女に吸はれてゐた。

二三秒の後彼は大佐の前に立つてゐた——老人は頭を肩の上に凭せて、氣持ちよささうに身をかきながら眠つてゐた。イポリット・セルゲーエヴィチの注意を引いた音はそれだけであつた。やがて

彼は、それ迄きこえてゐた單調な悲しい泣き聲は、自分の胸の中でするのではなく、窓の外で、雨が嘔り泣いてゐるので、自分の悲しい心が泣いてゐるのではないといふことを知つた。と知ると、  
またも胸の中に憤怒が閃めいた。

「お前は俺を弄んでゐる……お前は俺をこのやうに弄んでゐる！」……彼は齒を喰ひしばつてさう自分に繰り返した。そして何かやりこめるやうな折檻を以て彼女を嚇しつけるやうな心構へをした。胸はかつかつと熱してゐるのに、足や頭はまるで氷柱のやうであつた。

何かをさも面白さうに笑ひながら女達が入つて來た。それを見るとイポリット・セルゲーエヴィチは思はず身を引つ込めた。ラツチエツキーは、胸の中の何處かで泡が潰れるやうな力のない笑ひ方をしてゐる。ワアーレンカの顔はさもふざけたやうな笑ひに輝いてゐる。さうしてエリザウエーラ・セルゲーエウナはいかにも遠慮するやうに笑つてゐた。

「おそろくこの女達は俺のことを笑つてゐるのだらう？」とイポリット・セルゲーエヴィチは思つた。

ワアーレンカが言ひ出したランプの遊びに加はらなかつたイポリット・セルゲーエヴィチは夫を

きつかけに、氣分が悪いといふ口實を以て自分の部屋に退くことが出來た。居間を去る時、三人の女の眼が自分の背後を見てゐるやうな氣がした。そしてそのどの眼も驚いてゐるやうな氣がした。彼の心はかうした事には亂されはしなかつた。といふのは、あのいたづらな小娘に復讐してやらう、やりこめてやらうといふ心で一ぱいになつてゐたし、またあの女を泣かしてやらう、ちつと睨めて彼女が泣くまで笑つてやらうといふたくらみに思ひ耽つてゐたからであつた。けれどかうした感情もいつ迄もその緊張をつとけてはゐなかつた。また彼はかうした昂奮を理性の力で制へつけることに馴れてゐたので、その昂奮が靜まるまでそれを顔にも現はさなかつた。彼女は自分を弄んでゐるのだと思ふと、彼の名譽心は苦しいほど激した。さうなると、先刻やうやく制へつけた所の決心即ち彼女の美しさを全く無視することに依つて復讐してやらうといふ心がまたもむらむらと湧き起つて來た。さうすれば彼女は、彼に全然無視されてゐるといふことを氣づくに違ひない——けれどそれは言ふ迄もなく、彼女に對する復讐ではなくなつて、彼女の爲めになることであり、また彼女の見せしめとなることに違ひないと思つた。

こんな風に考へることはいつも彼の心を柔けたのであつた。がいまは、どうしても消すことが起



来ない所の何處まで壓迫して来る何物か、彼の胸に残つた。さうして彼はこの只一つの、殆んど苦しいほどの感情を殺してしまひたくも思ひ、同時に殺したくもないと思つた。

「呪はしくもこの名狀し難き感情よ！」と彼は自分に叫んだ。

と、雨漏りが何處からか床の上に落ちる、その單調な音、

「タツク……タツク……。」

彼は、吾れと我が心と争闘しながら、まだ不可解のまゝにあるものを解かうと努力しては失敗しながら、一時間ばかり坐つてゐたが、やがて床に入つて寢ようと決心した。それは朝になれば、自分を苦しめ惱ました凡てから解放されるだらうと思つたので、けれど床に横はるや、いつの間にか彼はワアーレンカの姿を思ひ浮べてゐる。電光の閃めきに喜んで胸を顫はしながら、恰かも人を抱擁するかのやうに兩腕をひろげて玄關の中に立つてゐた彼女の姿を思ひ浮べてゐるのである。とまたも、もしも彼女に對してもつと大膽だつたらといふ考へが閃めく……が彼はそこで自分を引き止めて、さういふ風に考へることを止めた——とまた彼は、堪らなく美しい女の腕に自分の首を抱きしめられることを想像する。だがその女は、まるで野良猫のやうに、恐ろしく譯が解らなく、がむ

しやらで、愚か者で、その上に下劣な肉慾を持つてゐる、恐らくさうだらう、と考へる。

と突然、かうした考への最中に、彼は或る驚愕か、でなければ何かの豫覺に刺戟された。そして彼は顫へ上り、飛び起きて、部屋の戸口の所へ走つて行き、その鍵を外した。それから彼は微笑みながらまたも床の上に横はり或る希望と狂喜を以て何かを考へながら、戸口の方をぢつと見詰め始めた。

「何か起つたぞ……何か始つたぞ……。」

彼は確かに、何處かで物音のしたのを聞いた。彼女が夜中に入つて来る、そして身體を任せる、何んにも言はず、何んにも欲求せず、たゞ彼の思ひのままに。ワアーレンカは……確かにあの小説の主人公と共通したものを持つてゐる——彼女はその主人公のした通りのことをすることが出来る。彼の女が力強くもかう叫んだのではないか、「おゝ！あなたの欲しかつたものはそれ(接吻)なのね？」と、その言葉で彼女は恐らく彼には解らない或る心を彼に傳へたのではないか！そこでいま、突然彼女が入つて来る、眞白い着物につままつて、そして恥かしさと肉慾に顫へながら！

彼は幾度か床から起き上つた。そして家の中の静けさに耳を澄した。窓を打つ雨の音に耳を傾け

た。さうしては熱し切つた身體を冷やした。けれど凡ては静かであつた。待ち焦れてゐる聲音もその静けさの中にひびかなかつた。

「彼女はどんな風にして入つて来るだらう？」と彼は自分に言つて見た。それから戸口の敷居の上に誇らかな大膽な顔をして立つた彼女を心に描いて見た——勿論彼女は、自分の美しさを誇りを以て彼に與へるに遠ひない。女王の與へる賜物のやうにして。或ひは彼女は頭を垂れ、耻かしさうに謙遜して、眼には涙を浮べながら彼の前に立つかも知れぬ。さうでなければ、彼女は、彼の苦悶を笑ひながら、靜かに笑ひながら現はれて来るかも知れぬ。その彼の苦悶は、彼女がよく知つてゐるもので、またいつもそれに氣づいてゐるものであるが、彼女は彼を苦しめる爲めに、また自分を喜ばせる爲めに、その苦悶に氣づいてゐるやうには決して見せなかつたものである。

このやうにして、まるで狂氣のやうな興奮の中に浸り、肉感的な場面をその空想で描きながら自分の神経を刺戟してゐたので、イポリット・セルゲーエヴィチは、外の雨が歇んで、晴れ渡つた空からは星が窓の中を覗き込んでゐたこともちつとも氣づかなかつた。彼は尙も聲音を、彼に喜びを持つて来る所の女の聲音を待ち望んでゐた。けれどその聲音は、眠つたやうな静けさの中には、つ

ひにひびかなかつた。時々ほんのちよつとの間、彼の若い女を抱擁する望みが消え去つたりした。やがて彼は、心臓の速かな鼓動の中に、自分自身に對する苛責の聲を聞いた。それから彼は、自分の最近の状態は、かつての自分には全く知らないものであつたといふこと、そして不愉快極まるものであるといふこと、更らに苦しく忌はしいものであるといふことを思ひ出した。けれど男の内面世界は非常に複雑したものであつて、凡ての抱負を平等に飽くまでも保有しながら、何か或る一つの事を受け容れようとする時はそれに都合のいゝやうに變化するものである。それ故にあらゆる男の生活には一つの深淵があつて、何かの機會が來ると、男はその深淵の中に恐れることもなく飛び込んでしまふのである。かくて、生活を支配する力の悲しい反逆の爲めに、普段の注意力まで深く失墜されてしまつて、自分自身を最も痛ましく害ふものである。

彼は夜の明けるまで、夢中で熱情に苦しめられてゐた。既に太陽が上つた時に聲音がきこえて來た。彼は床の上に座り、頭へながら、眼を睜つて待つてゐた。そして彼女が現はれたならば、自分は彼女に挨拶する爲めの言葉を一言も言へ得ないだらうと思つてゐた。けれど戸の所に近づいて來るその聲音はのろく、重さうである……。

と、戸が靜かに開いた……イポリット・セルゲーエヴィチは身體をそつと枕の上に投げかけて、眼を閉ぢたまゝちつとしてゐた。

「お目さめでせうか？長靴と……それからズボンを取りに参りましたのですが……。」といふ眠さうな聲で言つたのは女中のテクラであつた。彼女はさう言ひながら牛のやうにのろくさとベットへ近づいて來た。溜息をしながら、欠呻をしながら、そこらの道具に蹴つまづきながら、彼女は彼の着物を集めて出て行つた、その後、臺所の匂ひを残しながら。

彼は、終夜神經を悩ました様々の幻影の切れ切れが靜かに消えて行くのを、心の中に無關心に見ながら、滅茶苦茶な心で長い間横はつてゐた。

テクラが、よく刷毛をかけた服を持つて再び入つて來た。彼女はその服を置くとだるさうに喘ぎながら出て行つた。彼は服を着はじめた。どうしてそんなに早く服を被る必要があるのかといふことを考へもせず。やがて、考へて見もせず、川へ行つて顔を洗つてやらうと心を極めた。かう心を極めると、彼の心は或る程度まで元氣づいた。床の上をそつと歩いて、大佐の躰のしてゐる部屋を過ぎ、それから他の部屋の戸の前を過ぎた。彼はその部屋の戸の前でちよつとの間立ち止つた

がその戸を丹念に見てから、部屋の中には彼女一人がゐるのではないといふことが確かに解つた。で、つひに思ひ切つて庭へ出て行つた。それから狭い道を、それは川の方へ下りて行く道だと知ると、そこを歩いて行つた。

空は晴れて氣持よく、太陽の光りは未だ朝明けの蔷薇色を失はなかつた。椋鳥が櫻んぼを啄みながら、元氣よく互ひに囀り交はしてゐる。木の葉には、露の玉がダイヤモンドのやうに輝いてゐる。その露は楽しさうに輝きながら地面に落ちては消えた。地面は濡れてゐた、けれど夜の間に降つた雨を悉く吸ひ取つてしまつてゐるので、ぬかるみや水溜りは何處にもなかつた——四邊の何も彼もが純潔で活々して新らしかつた——何も彼もが昨夜の間に生れたかのやうに、そして凡てが靜かで動かない。それは恰かも未だ地上の生活に使はれなかつたかのやうであつた。そして何よりも先に太陽を見て、その沈黙の驚きの中に太陽の素晴らしい美しさを讚美してゐるかのやうであつた。

イポリット・セルゲーエヴィチは、昨夜彼の心と靈とを包んでゐた泥のやうな屍衣を脱ぎ棄てた。そして快よい新鮮な香氣の充ちた新生の日の純潔な空氣を吸ひ始めた。

川へ来た。太陽は未だ薔薇色と金色に輝いてゐた。川の水は雨で少しく濁つてはゐたが、岸の緑をその水面に靜かに映してゐた。何處か近くで魚が跳ねた。この魚の跳ねる音と、小鳥の歌とだけが、朝の靜けさを破る唯一の音であつた。もし地面が濡れてさへゐなかつたなら、彼は川の傍に、綠樹天蓋を仰いで地面に横たはつたかも知れなかつた。そして自分の體が、昨夜の熱情から脱却してその安靜を得るまでそのまま寝てゐたかも知れなかつた。

イポリット・セルゲーエヴィチは川岸に添つて歩いて行つた。仄かにも曲りくねつた砂の州、綠樹に圍まれた小さな淵、といふ風に、新らしい景色が殆んど五六歩毎に彼の前に展がつて行つた。さうして彼が汀を無口で歩いて行くと、新らしい、永遠に新らしい景色が彼を待つてゐるのであつた。で、彼は、どの淵の形も、どの木の恰好も、その方へ身を寄せては精細に調べ見た。それは恰かも一生懸命確實に見屈けて、そしてつひ今見たばかりの景色と、眼の前の景色との相違を明らかにしようとするかのやうであつた。

と、突然彼は歩き止めて、眼をきらめかした。

眼の前に、腰の上まで水に浸つたワァーレンカが立つてゐたのである。彼女は頭を伏せ兩手で濡

れた髪を絞つてゐる。彼女の身體は水の冷たさと太陽の光りとで薔薇色になり、肌の上の水玉が銀の鱗のやうに輝いてゐる。その水玉は彼女の肩から胸から靜かに滴たつては水の上に落ちる。その落ちる前に水玉は、折角取りついた肌を去るに忍びないかのやうに、長い間太陽の光りの中に輝いてゐる。髪から滴る水は、その優しい水玉の音を四邊に快よくひびかせはがら、女の薔薇色の指の間をすり抜けて落ちた。

彼は恍惚となつて、何か神聖なものに對した如く、或る敬虔ささへ持つて彼女の方を見てゐた——それ程彼女の美しさは、彼女の若さの活々しさを食りながら清淨にして且つ調和してゐた。彼は何等の肉慾も感じなかつた。また彼女を見守つてゐることをも遠慮した。頭上の榛の藪の小枝の上には、鶯が啼きつ歌ひつしてゐた。が、それは彼の爲めに囀つてゐるのではなかつた。太陽の凡ての光りも、あらゆる物聲も、たゞ水の中の彼の若い女にのみ集中されてゐるのであつた。川の水は柔かに彼女の身體を撫でながら音もなく接吻するかのやうに過ぎては、靜かた流れを下つて行つた。

しかし美しきものは尠ない如く、善いものは長くはつゞかないものである。その善いものはほんの二三秒間見ただけであつて彼女は急に頭を擧げると、怒つたやうに叫びながら、いち速くもそ

の首の所まで水に浸つてしまつたのである。

彼女のこの動作は彼の心に反寫した——彼は顫へながら、縮み上るほどの冷たさを感じた。彼女はちらりと彼の方を見た。その眉は怒りに蹙み、その顔は恐れと輕蔑と怒りとに歪んでゐる。彼女はぶりぶりした聲で叫んだ。

「行つて頂戴……あつちへ行つて頂戴！何をしてゐらつしやるの？あなたは御自分のことが恥かしくないのね？」

しかし彼女の聲は、何處か遠いかすかな、彼の全く知らない所からひゞいて来るやうに彼には聞えるのである。彼は兩腕を伸し、不自然に曲げた身體を支へようと力を入れる爲めにぶるぶる顫へる兩足を辛うじて立たせ、熱情の懊惱に燃えながら水の上にとんでしまつた。彼の身體全體が、彼の全身の悉くの細胞が彼女の方に吸ひ取られてしまつた。と、たうとう彼は殆んど水に浸るやうな所へ膝まづいてしまつた。

と、彼女はまたも怒り出した。そして泳ぎ去らうとした。がまた停つて、今度は低い苛々した聲で言つた。

「行つて下さいよ……誰れにも言へやしませんから……。」

「それが出来ないんだ……。」と彼は答へようとしたが、唇が顫へて聲が出なかつた。唇はもう何も言ふ力も失つてしまつたのである。

「しつかりしなさいよ……あなた！行つて下さい！」と彼女は叫んで、「ほんとに、厭な、卑しい人……。」

かうした罵言も彼に取つては何であつたらう？彼はその乾いた燃えるやうな眼でちつと彼女を見詰めてゐるのだ。そしてそこに膝まづいたまゝ凝つとしてゐるのだ。たとへ誰かゝ來て斧を振りかざし、彼の頭蓋を打ち割らうとしてゐるのを知つても、彼はさうしてゐるであらう。

「まア—あなたは……厭な犬よ……さア、あなたの欲しいものを上げませう……。」と彼女はさも憎々しくつぶやいて、急に水から飛び出し彼の方へ近づいて來た。

彼女は彼の前にだんだん近づいて來た。恰かも自分の美しさを以て彼を眩暈させようとするかのやうに近づいて來た——と、彼女はもう直ぐ眼の前に、實に美しく、けれどぶんぶん怒りながら、その爪先ですつくりと立つた。彼はそれを見た、そして堪らなく苛々する心でちつとしてゐ

た。と、彼女は彼の方に身體をこよめた……彼は兩腕を差し伸べた。けれど抱いたものは空であつた。

その瞬間、何か冷たい重いもので、眼が見えなくなる程顔を打たれた。そして彼は後に倒れてしまった。

彼は素早く眼を拭き始めた——濡れた砂がひついてゐた。と、頭と言はず、肩と言はず、胸と言はず、拳骨が雨と降つて來た。けれど彼はその拳骨を少しも痛いと感じなかつた。反つて別な感情が湧いて來るのを感じた。彼は頭の上に兩手をかざしてその拳骨を防いだが、それは無意識に、寧ろ機械的にさうしたのであつた。やがて彼女は怒り泣きを始めた……たうとう、彼は胸の上をぐつと言ふほど殴られて、仰向きに倒されてしまった。彼女はもう打たなかつた。藪が、風にさらさらと鳴つてやがて静かになつた。

藪の風音が消えた後の、吸はれたやうな沈黙の二三秒間が恐ろしく長かつた。彼は自分の不體裁に閉口して、身動きもせず寝てゐた。そしてこの恥かしい思ひから自分自身を隠さうとする本能的の欲求に驅られて、無性に身體を土の中へ押し込めた。やがて眼を開けると、そこには無限に深い

蒼い空があつた。その空は非常な速さで、すつと速く高く高く昇つて行つてしまふやうに見えた……それを見てゐると彼は呻るやうに重苦しい息をついた。そして自分自身が、何處か、何の感覺もない世界へ靜かに沈んで行くやうな氣がした。

……さうして彼は、身體が冷たくなるまで寝てゐた。やがて再び眼を開くと、そこにはワアーレンカが彼の上にとどんでゐた。彼女の指の間から落ちる涙が彼の顔に注いでゐる。彼女は泣きながら言ふのである。

「……ねえ、それでいゝの？こんな態で家へどうして歸れますの？……すつかり汚れて、泥だらけで、びしょ濡れで、破れて……え、お馬鹿さん！……岸から川の中へ轉げただとお言ひなさいよ……御自身のことか耻かしくないの……もしさうでなくみんなに思はれたら……わたし、あなたを殺してしまひますよ……覚えていらつしやい。」

それから彼女はもつとゐろんなことを彼に言つた。がさうした言葉は、少なくとも彼の感じてゐるものを減らしもしなければ増しもしなかつた。それで彼は彼女の言ふことには答へなかつた。やがて彼女は歸ると言ひ出した。そこで彼は靜かに訊いた。

「ワアーレンカさん……僕はもう二度と……あなたに會はないでせう」

これを言つた時に彼は、「赦して呉れ……」といふ言葉を彼女に言ふべきだと気づいた。

けれど彼はそれを言はずにしまつた。といふのは、彼女は手を振りながら既に樹木の間消えて行つてしまつたからであつた。

彼は、木の幹か何かに凭れて座つてゐた。そして足元を流れて行く川の濁つた水をぼんやり見詰めてゐた。

水は靜かに流れて行く……靜かに……靜かに流れて行く……。

— 完 —

### マキシム・ゴオルキイ小傳

ゴオルキイは一八六八年三月十四日、露國ニジニ・ノヴゴロドに生れた。本名はアレキセイ・マキシモフツチ・ブイエシコフと言ふ。マキシム・ゴオルキイはベン・ネームである。

彼の父は貧しい室内裝飾工であつた。母は相當の資産を持つた染物師の娘であつた。二人は戀し合つて夫婦となつた。しかし母は貧しい一職工を戀をしたため、父の怒りに觸れ少しの財産も分けて貰ふことが出來ずに追ひ出されてしまつた。

彼はこの父母の下で成人することは出來なかつた。九歳の時に孤兒となつたのである。そして母方の祖父の所に引き取られた。がそこにも長く養はれてゐることは出來ず、やがて靴直しの家に奉公に出された。そこで彼は手に大火傷を負つて祖父の所へかへされた。傷が癒ると今度は或る畫工の手傳としてそこに奉公したが、主人の虐待甚だしく堪えかねて逃げ出した。

その時は唯一人の寄る邊である祖父もこの世になかつた。で彼は幾度か餓死せんとし、辛うじて

ヴォルガ河の蒸汽船の裏所のボーイとなつた。この船の料理人にスムリイといふ男がゐた。文學に興味を持つてゐていろいろの文藝書を持つてゐた。彼はこの男からそれ等の本を借りて讀んだ。主にゴオゴル、アレクサンドル・デュマ等のものを讀んだ。

これが動機となり彼はどうかして學問をして見たいといふ希望を持ち始めた。その希望はますます強くなり、つひに決心して彼はカザン大學に出かけて行つた。そして學問をさせて呉れと頼んだ。學資などは一文もなかつた。が彼は大學といふ所は一文なしの志願者を教育してくれる所と思ひ込んでゐたのである。固よりそれは拒絶せられた。

彼の失望はいふまでもない。貧窮はますます迫る。彼は止むを得ずパン製造所に傭はれた。小説「二十六人と一人」はこの時の生活を描いたものである。

けれど茲にも長くはつとかなかつた。やがてこゝを出て、木挽となつた。それから荷揚人足となつた。ヴォルガ河畔で或る賣笑婦に助けられたのはこの頃である。しかし彼を永遠に救ふものはつひになかつた。貧窮、飢餓はますます襲ひ来る。彼はその壓迫に堪え切れなくなつた。そしてその生活難から永遠に遁れる最後の道を選んだ。それは自殺といふ道であつた。が、幸か不幸かピスト

ルの彈丸は急所を外れた。

絶望の生活がつといた。彼は傷の癒るのを待つて放浪生活に入つた。彼はかうした間にいろいろの文學書を読んだ。それが現在の彼を救ふ唯一のものであつたのである。ベツサラビア、クリミヤ、クバーン、コオカサス、チフリスと轉々として流浪し、その間には果物賣、鐵道のシグナルマン、大道でのビール賣り、埠頭での人足、鹽製造工夫といふ風にありつけばどんな仕事でもした。かうした流浪生活時代のことば、その後多くの短篇となつて現はれてゐる。「チユルカツン」「旅の道づれ」などもそれである。

チフリスでは鐵道員になつた。こゝで彼は多くの教育ある人々と知り合つた。彼はそれ等の一人から文筆を執ることを教へられた。シェークスピア、ゲーテ、バイロンの諸作もこの時に讀んだ。

廿五歳の時に始めて小説を書いた。それが「マカアル・テユードラ」である。これはカウカス新聞といふのに載せられた。

その後生れ故郷のニジニ・ノゾゴロドに歸り、そこでラニンといふ辯護士と交際した。この人は文學にも明るく、彼の非凡な才能を認めていろいろの方面に力を盡してくれた。この時、この土地



にコロレンコが「ルスコエ・バガツスウオ」といふ雑誌を編輯してゐた。コロレンコも彼の才能を認めて、さまざまの方面に斡旋の勞を執つた。かくて彼はだんだんと認められて來た。

一九〇二年、彼が三十五歳の時、彼は四幕の戯曲「どん底」を發表した。この作を以て彼の名は一躍世界的となつた。

一九〇四年、彼はベテルブルグ科學院の文學部の名譽會員に選ばれた。がその翌年の政變のために社會民主主義に組するものとして告發せられ、名譽會員の肩書を奪はれた。そして彼は外國に亡命しなければならなくなつた。

彼は少しの間巴里に滞在した。それから米國に渡つた。この時にモスクワ藝術座の舊女優アンドレイエワと結婚した。が間もなく彼は肺を病み出した。彼は米國を去り、妻とも別れてカプリ島に居を定め、そこで病ひを養生してゐた。

世界戦争が始つた。そして彼は漸く祖國に呼び戻された。露國は勞農政府のものとなつた。彼は始めこの政府に對して好意を持つことが出来なかつた。しかし間もなくその政府に入つた。そして重に教育的事業に當つた。長い間の親交をつゞけて來たアンドレイエフとつひに絶交するに至つた

のも、彼が勞農政府に入つたが爲めであつた。アンドレイエフは最後まで勞農政府に反いてゐた。政府の名に依つて彼がアンドレイエフの貧窮を救はんとしたが、アンドレイエフはつひに應じなかつた。そして殆んど餓死するやうにして死んだ。これは彼に取つては寂しいことに違ひなかつた。しかし彼もたうとう勞農政府に反かざるを得なくなつた。彼は再び母國を去つた。そしていまはイタリアに在るといふ。病ひ篤しとの報があつたのは最近である。

——大正十三年十月——

大正十三年十一月十二日印刷  
大正十三年十一月十七日發行

(定價金壹圓六拾錢)

ウ ソレオ・カンレアワ

譯者 下村 千秋

發行者 足立 欽一

印刷者 中川 二郎

東京市四谷區新宿一丁目五十一番地

發行所

聚芳閣

電話四谷五十一番  
振替東京五六一四七番

新榮印刷株式會社印刷

聚芳閣出版文藝書

(はがきにて申越  
次第出版目録進呈)

綿貫 六助氏著 長篇小説 戦 争 郵價二・三〇  
一五〇

中西伊之助氏著 長篇小説 一 人 生 記 録 郵價一・四〇  
一四〇

近藤 榮一氏著 長篇小説 沙 本 姫 郵價一・四〇  
一四〇

前田河廣一郎氏著 長篇小説 快 樂 師 の 群 郵價一・四〇  
一四〇

足立 欽一氏著 長篇小説 迦 留 陀 夷 郵價二・五〇  
一五〇

高梨 直郎氏著 長篇小説 買 は れ た 貞 操 郵價一・〇〇  
一五〇

加宮 貴一氏著 長篇小説 屏 風 物 語 郵價一・四〇  
一三〇

新井 紀一氏著 長篇小説 落 葉 の 如 く 郵價一・四〇  
一三〇

佐々木味津三氏著 長篇小説 二 人 の 異 端 者 郵價一・四〇  
一三〇

下村 千秋氏著	長篇小説	刑罰	郵價一・四三〇
足立 欽一氏著	戯曲集	愛闘	郵價一・九五〇
倉田 潮氏著	長篇小説	放浪	郵價一・五三〇
薄田 斬雲氏著	隨筆集	愛兒の靈に	郵價一・〇四〇
チ・エツチ・ローレンス原著 小島 徳彌氏譯	長篇小説	大尉の人形	郵價一・五三〇
ズウデルマン原著 井伏 鱒二氏譯	長篇小説	父の罪	郵價一・六三〇
マツケン江女 原著 若山 静江氏史譯	長篇小説	愛は永遠に	郵價一・七三〇
マキシム・ゴオルキイ作 下村 千秋氏譯	長篇小説	ワアレнка・オレソウ	郵價一・六三〇
エノン 信男氏原著 光 成信氏譯	科學小説	世界の始め	郵價一・五三〇
シンク 宗ア勳氏原著 神山 宗ア勳氏譯	事實物語	赤・黒・白	郵價一・五三〇
映畫劇協會編	脚本集	近代映畫劇脚本選集	郵價一・八六〇

538  
26

14年 4月 7日

○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

調査済

李

海

水

終

